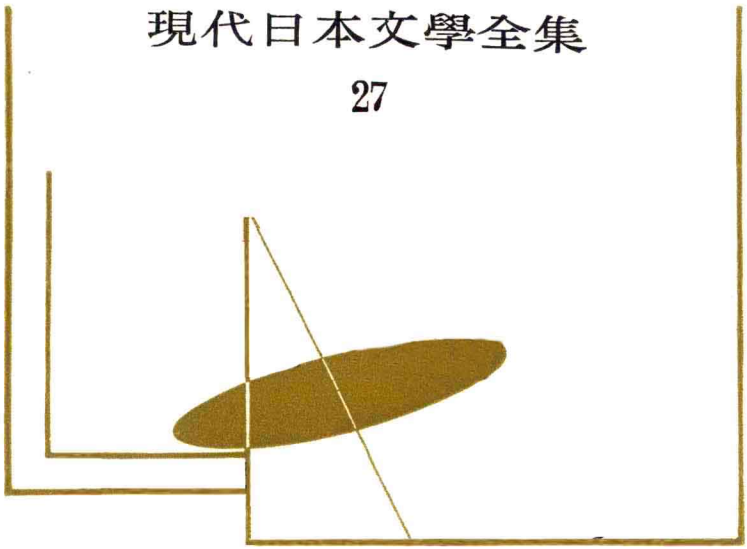
菊池寛
室生犀星
集

現代日本文學全集

27



摩書房版

現代日本文學全集 27

菊池寛
室生犀星集

昭和三十年八月十日 印刷
昭和三十年八月十五日 發行

著者 室生犀星 菊池寛

東京都千代田區神田小川町二ノ八
發行者 古田晁

東京都青梅市根ケ布三八五
印刷者 山田一雄

東京都千代田區神田小川町二ノ八
發行所 筑摩書房
〔電話〕東京二九局(29)七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八

製本 牧製本株式會社
印刷 株式會社精興社
整版 株式會社精興社

菊池寛集　目次

身投げ救助業……五
恩を返す話……九
大島が出來る話……一五
死者を嗤ふ……二一
無名作家の日記……二四
忠直卿行狀記……三七
恩讐の彼方に……五一
葬式に行かぬ譯……六五
出世……七五
蘭學事始……八一
入れ札……九一
島原心中……九七
仇討三態……一〇六
好色物語……一一六
屋上の狂人……一五七
父歸る……一六三
眞似……一六九
半自敍傳……一七五

室生犀星集　目次

抒情小曲集……二一七
幼年時代……二四一
性に眼覺める頃……二六一
或る少女の死まで……二八六
あにいもうと……三一四

大陸の琴……三三四
生涯の垣根……三八〇
菊池寛論（青野季吉）……三九七
室生犀星（中村光夫）……四〇四
鞄（ボストン・バッグ）……三八七
解説……四一五
年譜……四二三

装幀　恩地孝四郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

菊池寛集

應無所住
而生其心

菊池寛

身投げ救助業

物の本によると京都にも昔から、自殺者は可なり多かつた。

都は何時の時代でも田舍よりも生存競爭が烈しい。生活に堪へ切れぬ不幸が襲つて來ると、思切つて死ぬ者が多かつた。洛中洛外に烈しい饑饉などがあつて、親兄弟に離れ、可愛い妻子を失うた者は世をはかなんで自殺をした。除目に洩れた腹立まぎれや、義理に迫つての死や、戀の叶はぬ絶望からの死、數へて見れば際限がない。まして德川時代には相對死など云うて、一時に二人宛死ぬ事さへあつた。

自殺をするに最も簡便な方法は先づ身を投げることであるらしい。之は統計學者の自殺者表などを見ないでも、少し自殺と云ふことを眞面目に考へた者には氣の付く事である。所が京都にはよい身投げ場所がなかつた。無論鴨川では死ねない、深い所でも三尺位しかない。だからおしゆん傳兵衞は鳥邊山で死んで居る。大抵は縊れて死ぬ。汽車に轢かれるなどと云ふ事も無論なかつた。

然しどうしても身を投げたい者は、清水の舞臺から身を投げた。『清水の舞臺から飛んだ氣で』と云ふ文句があるのだから、この事實に誤りはない。然し下の谷間の岩に當つて碎けて居る死體を見たりまたその噂を聞くと、模倣好きな人間も二の足を踏む。何うしても水死をしたいものは、お半長右衞門の樣に桂川迄辿つて行くか、逢坂山を越え琵琶湖へ出るか、嵯峨の廣澤の池へ行くより外に仕方がなかつた。然し死ぬ前のしばらくを、十分に享樂しようと云ふ心中者などには、この長い道程もあまり苦にはならなかつただらうが、一時も早く世の中を逃れたい人達には二里も三里も、歩く餘裕はなかつた。それで大抵は首を縊つた。聖護院の森だとか、糺の森などには椎の實を拾ふ子供が、宙にぶらさがつて居る屍體を見て、驚くことが多かつた。

それでも京の人間は澤山自殺をして來た。凡ての自由を奪はれたものにも、自殺の自由丈は殘されて居る。牢屋に居る人間でも自殺丈は出來る。兩手兩足を縛られて居ても極度の克己を以て息をしないことによつて、自殺丈けは出來る。

ともかく、京都によき身投げ場所のなかつた事は事實である。然し京都の人々はこの不便を忍んで自殺をして來たのである。適當な身投げ場所のないために、自殺者の比例が江戸や大阪などに比べて小であつたとは思はれない。

明治になつて、槇村京都府知事が疏水工事を起して、琵琶湖の水を京に引いて來た。此の工事は京都の市民によき水運を具へ、よき水道を具へると共に、またよき身投げ場所を與へる事であつた。

疏水は幅十間位ではあるが、自殺の場所としては可なりよい所である。どんな人間でも、深い海の底などでフワフワして、魚などにつつかれて居る自分の死體の事を考へて見ると、餘りいい心持はしない。譬へ死んでも、適當な時間に見付け出されて、葬をして貰ひたい心がある。それには疏水は絶好な場所である。蹴上から二條を通つて鴨川の緣を傳ひ、伏見へ流れ落ちるのであるが、何處でも一丈位深さがあり、水が綺麗である。それに兩岸に柳が植ゑられて、夜は蒼いガスの光が烟つて居る。先斗町あたりの絃歌の聲が鴨川を渡つて聞えて來る。後には東山が靜に横はつて居る。雨の降つた晩などは兩岸の青や紅の灯が水に映る。自殺者の心にこの美しい夜の掘割の景色が一種の Romance を惹き起して、死ぬのが餘り恐ろしいと思はれぬやうになり、フラフラと飛び込んでしまふことが多かつた。

然し、身體の重さを自分で引き受けて水面に飛び降りる刹那には、どんなに覺悟をした自殺者でも悲鳴を擧げる。之は本能的に生を慕ひて死を怖れるうめきである。然しもう何うする事も出來ない。水烟を立てて沈んでから皆一度は浮き上る、その時には助からうとする本能の心より外何もない。手當り次第に水を摑む、水を打つ、あへぐ、うめく、もがく。その内に弱つ

て意識を失うて死んで行くが、もしこの時救助者が繩でも投げ込むと大抵は夫を摑む。之を摑む時には投身する前の覺悟も助けられた後の後悔も心には浮ばない。ただ生きようとする強き本能がある丈である。自殺者が救助を求めたり、繩を摑んだりする矛盾を笑うてはいけない。

ともかく、京都はいい身投げ場所が出來てから、自殺するものは大抵疏水に身を投げた。

疏水の一年の變死の數は、多い時には百名を超したことさへある。疏水の流域の中で、最もよき死場所は、武德殿のつい近くにある淋しい木造の橋である。インクラインの傍を走り下つた水勢は、なほ餘勢を保つて岡崎公園を廻つて流れる。そして公園と分れようとする所に、この橋がある。右手には平安神宮の森に淋しくガスが輝いて居る。左手には淋しい戸を閉めた家が並んで居る。從つて人通りが餘りない。それでこの橋の欄杆から飛び込む投身者が多い。岸から飛び込むよりも橋からの方が投身者の心に潜在して居る芝居氣を、滿足せしむるものと見える。

處が、この橋から四五間位の下流に、疏水に沿うて一軒の小屋がある。そして橋から誰かが身を投げると、必ず此家から極まつて背の低い老婆が飛出して來る。橋からの投身が、十二時より前の場合は大抵變りがない。老婆は必ず長い竿を持つて居る、そしてその竿をうめき聲を目當に突き出すのである。多くは手答へがある。もしない場合には水音とうめき聲を追掛けながら、幾度も幾度も突き出すのである。それでも遂に手答へなしに流れ下つてしまふ事もあるが、大抵は竿に手答へがある。夫を手繰り寄せる頃には、三町ばかりの交番へ使ひに行く位の厚意のある男が、屹度彌次馬の中に交つて居る。多であれば火をたくが夏は割合に手輕で、水を吐かせて身體を拭いてやると、大抵は元氣を恢復し警察へ行く場合が多い。巡査が二言三言不心得を悟すと、口籠りながら、詫言を云ふのを常とした。

かうして人命を助けた場合には、一月位經つて政府から褒狀に添へて一圓五十錢位の賞金が下つた。老婆は之を受け取ると、先づ神棚に供へて手を二、三度たたいた後郵便局へ預けに行く。

老婆は第四回內國博覽會が岡崎公園に開かれた時今の場所に小さい茶店を開いた。駄菓子やみかんを賣るささやかな店であつたが、相當に實入もあつたので、博覽會の建物が段々取り拂はれた後もその儘で商賣を續けた。之が第四回博覽會の唯一の記念物だと云へば云へる。老婆は死んだ夫の殘した娘と、二人で暮して來た。小金がたまるに從つて、小屋が今の樣な小綺麗な住居に進んで居る。

最初に橋から投身者があつた時、老婆は何うする事も出來なかつた。大聲を擧げて呼んでも、滅多に來る人がなかつた。運よく人の來る時には、投身者は疏水の可なり烈しい水に捲き込まれて、行衛不明になつて居た。こんな場合には老婆は暗い水面を見つめながら、微かに念佛を唱へた。然し、かうして老婆の見聞きする自殺者は、一人や二人ではなかつた。二月に一度、多い時には一月に二度も老婆は自殺者の悲鳴を聞いた。それが地獄に居る亡者のうめきのやうで、氣の弱い老婆には何うしても堪へられなかつた。到頭老婆は自分で助けて見る氣になつた。餘程の勇氣と工夫とで、老婆が物干の竿を使つて助けたのは、二十三になる男であつた。主家の金を五十圓ばかり費ひ込んだ申譯なさに死なうとした、小心者であつた。巡査に不心得を悟されると、此男は改心をして働くと云つた。夫から一月ばかり經つて、彼女は府廳から呼び出されて、褒美の金を貰つたのである。その時の一圓五十錢は老婆には大金であつた。彼女はよくよく考へた末、その頃やや盛んになりかけた郵便貯金に預け入れた。

それから後と云ふものは、老婆は懸命に人を救つた。そして救ひ方が段々うまくなつた。水音と悲鳴とを聞くと老婆は急に身を起して裏へかけ出した。そこに立てかけてある竿を取り上げて、漁夫が鉾で鯉でも突くやうな構で、水面を睨んで立つて跪いてゐる自殺者の前に竿を巧みに差し出した。竿が目の前に來た時に取りつかない投身者は一人もないと云つてよかつた。夫を老婆は懸命に引き上げた。通りがかりの男が手傳つたりする時には、老婆は不興であつた。自分の特權を侵害されたやうな心持がしたからである。老婆は斯のやうにして、四十三の年か

ら五十八の今迄に、五十幾つかの人命を救うて居る。だから褒賞の場合の手續なども頗る簡單になつて、一週で金が下るやうになつた。府廳の役人は「お婆さんまたやつたなあ。」と笑ひながら、金を渡した。老婆も初めのやうに感激もしないで、茶店の客から大福の代を、貰ふやうに「大きに。」と云ひながら受け取つた。世間の景氣がよくて二月も、三月も、投身者のない時には、老婆は何だか物足らなかつた。娘に浴衣地をせびられた時などにも、老婆は今度一圓五十錢貰うたらと云うて居た。その時は六月の末で例年ならば投身者の多い季であるのに、何うしたのか飛び込む人がなかつた。老婆は毎晩娘と枕を並べながら聽耳を立てて居た。それで十二時頃になつて、愈々駄目だと思ふと「今夜もあかん。」と云うて目を閉ぢる事などもあつた。

老婆は投身者を助けることを非常にいい事だと思つて居る。だから、よく店の客などと話して居る時にも「私でも之で、人さんの命をよつぽど助けて居るさかへ、極樂へ行かれますわ。」と云うて居た。無論その事を誰も打ち消しはしなかつた。

然し老婆が不滿に思ふことが、ただ一つあつた。夫は助けてやつた人達があまり老婆に禮を云はない事である。巡査の前では頭を下げて居るが、老婆に改めて禮を云ふものは殆どなかつた。まして後日改めて禮を云ひに來る者などは一人もない。「折角命を助けてやつたのに薄情な人だなあ。」と老婆は腹の裡で思つて居た。

ある夜、老婆は十八になる娘を救うた事がある。娘は正氣が付いて自分が救はれた事を知ると身も世もないやうに、泣きしきつた。やつと巡査にすかされて警察へ同行しようとして橋を渡らうとした時、娘は巡査の隙を見て再び水中に身を躍らせた。然し娘は不思議にもまた、老婆の差し出す竿に取りすがつて救はれた。

老婆は再度巡査に、連れられて行く娘の後姿を、見ながら、「何遍飛込んでもやつぱり助かりたいものやなあ。」と云うた。

老婆は六十に近くなつても、水音と悲鳴とを聞くと必ず竿を差し出した。そしてまたその竿に取りすがることを拒んだ自殺者は一人もなかつた。助かりたいから取りつくのだと老婆は思つて居た。助かりたいものを助けるのだから、これ程いいことはないと老婆は思つてゐた。

今年の春になつて、老婆の十數年來の平靜な生活を、一つの危機が襲つた。夫は二十一になる娘の身の上からである。娘はやや下品な顏立ではあつたが、色白で愛嬌があつた。

老婆は遠緣の親類の二男が、徵兵から歸つたら、養子に貰つて貯金の三百幾圓を資本として店を大きくする筈であつた。之が老婆の望みであり樂しみであつた。

處が、娘は母の望みを見事に裏切つてしまつた。彼女は熊野通り二條下るにある熊野座と云ふ小さい劇場に、今年の二月から打ち續けて居る嵐扇太郎と云ふ旅役者とありふれた關係に陷ちて居た。扇太郎は巧みに娘を唆かし、母の貯金の通帳を持ち出させて、郵便局から金を引き出し、娘を連れたまま何處ともなく逃げてしまつたのである。

老婆には驚愕と絶望との外、何も殘つて居なかつた。ただ店にある五圓にも足りない商品と、少しの衣類としかなかつた。それでも今迄の茶店を續けて行けば、生きて行かれない事はなかつた。然し彼女には何の望もなかつた。

二月もの間、娘の消息を待つたが徒勞であつた。彼女にはもう生きて行く力がなくなつて居た。彼女は死を考へた。幾晩も／＼考へた末に、身を投げようと決心した。そして堪へがたい絶望の思を逃れ、一には娘へのみせしめにしようと思つた。身投の場所は住み馴れた家の近くの橋を選んだ。彼所から投身すれば、もう誰も邪魔する人はなからうと、老婆は考へたのである。

老婆はある晩、例の橋の上に立つた。自分が救つた自殺者の顏がそれからそれと頭に浮んで然も凡てが一種妙な、皮肉な笑を湛へて居るやうに思はれた。然し多くの自殺者を見て居たお蔭には、自殺をすることが家常茶飯のやうに思はれて、大した恐怖をも感じなかつた。老婆はフラフラとしたまま欄杆から、ずり落ちるやうに身を投げた。

彼女がふと、正氣付いた時には、彼女の周圍には巡査と彌次馬とが立つて居る。之はいつも彼女が作る集團と同じであるが、ただ彼女の取

る位置が變つて居る丈である。野次馬の中には巡査の傍にいつもの老婆が居ないのを不思議に思ふものさへあつた。

老婆は恥しいやうな憤ろしいやうな、名狀しがたき不愉快さを以て周圍を見た。所が巡査の傍の何時も自分が立つべき位置に、色の黑い四十男が居た。老婆は、その男が自分を助けたのだと氣の附いた時、彼女は攫み付きたいほど、その男を恨んだ。いい心持に寢入らうとするのを、叩き起されたやうなむしやくしやした、烈しい怒が、老婆の胸の裡に充ちて居た。

男はそんな事を少しも氣付かないやうに「もう一足遲かつたら、死なしてしまふ所でした。」と巡査に話して居る。それは老婆が幾度も、巡査に云うた覺えのある言葉であつた。その內には人の命を救つた自慢が、あり〳〵と溢れて居た。

老婆は老いた肌が見物にあらはに、見えて居たのに氣がつくと、あわてて前を搔き合はせたが、胸の裡は怒と恥とで燃えて居るやうであつた。見知り越しの巡査は「助ける側のお前が自分でやつたら困るなあ。」と云うた。老婆は夫を聞き流して逃けるやうに自分の家へ駈け込んだ。巡査は後から入つて來て、老婆の不心得を悟したが、夫はもう幾十遍も聞き飽きた言葉であつた。その時ふと氣がつくと、あけたままの表戸から例の四十男を初め、多くの野次馬が物めづらしくのぞいて居た。老婆は狂氣のやうに駈けよつて烈しい勢で戸を閉めた。

老婆はそれ以來淋しく、力無く暮して居る。彼女には自殺する力さへなくなつてしまつた。娘は歸りさうにもない。泥のやうに重苦しい日が續いて行く。

老婆の家の背戸には、まだあの長い物干竿が立てかけてある。然しあの橋から飛び込む自殺者が助かつた噂はもう聞かなくなつた。

（大正五年九月）

人生の爲の藝術

世の中に人生の爲でない藝術があらうとは信じない。藝術至上主義と云ふことがある。「藝術の爲の藝術」と云ふことがある。之等の人々は人生の他の理想に奉仕することではなくして、藝術上の理想にのみ奉仕すると云ふのであらう。が、彼がさうして作り上げた理想的藝術品は、何に役立せるためであらうか。それは、人間を良くし淨くし高くする爲ではなからうか。これを要するに、藝術至上主義はよき藝術品を作ることを念としながら、間接に人生に奉仕して居る譯である。よき藝術品が人生の爲になれば、それを求むることを念とする藝術至上主義は間接に人生に奉仕して居る。否此の方が却つて直接に人生に奉仕するものかも知れない。何となれば、「人生の爲の藝術」の如く、道德上の理想などには奉仕しないから。

あくまでも現實萬能

自分は、死に就いて何も考へたことがない。自分は、あくまでも現實萬能だ。むろん、大病にでもかかつて死に面するときは、多少の煩悶はするかも知れない。然し、それが死病であれば、そんな煩悶も、死が短かくして呉れるだらう。生に就いてさへ、考へ切れない。況んや死についてをやだ。生きる丈け生き、そして死が來れば百年目だ。臨終は、少し苦しいかも知れない。が、いよ〳〵となると、案外あきらめが付くやうな氣がする。未來は必ずないだらう。もしあつたら、儲けものである。（生死觀を問はれて）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

恩を返す話

寛永十四年の夏は、九州一圓に、近年にない旱炎な日が續いた。其上に又、夏が終に近づいた頃、來る日も、來る日も、西の空に落つる夕陽が、眞紅の色に燃え立つて、人心に不安な期待を、植ゑ付けた。

九月に入ると、肥州溫泉ヶ嶽が、數日に亙つて、鳴動した。頂上の噴火口に、投げ込まれた切支丹宗徒の、怨念の爲す業だと云ふ流言が、肥筑の人々を懍れしめた。

凶兆は尙續いた。十月の半になつたある朝、人々は、庭前の梅や櫻が、時ならぬ蕾を持つて居るのを見た。

十月の終になつて、之等の不安や、恐怖の高層が遂に到來した。夫は、云ふ迄もなく、島原の切支丹宗徒の蜂起である。

肥後熊本の細川越中守の藩中は、天草とは、唯一脈の海水を隔つるばかりであるから、賊徒蜂起の飛報に接して、一藩は忽ち、强い緊張に囚はれた。

而も一揆が苟めの、百姓一揆と違つて、手强い底力を持つて居る事が知れるに從つて、一藩の人心は、愈猛り立つた。家中の武士は、元和以來、絶えて使はなかつた、陣刀や、半弓の手入れをし始めた。

松倉勢の敗報が、頻々と傳へられる。然し、藩主忠利侯は在府中である上に、妄りに、援兵を送る事は、武家法度の堅く、禁ずる所であつた。國老達の協議の末、藩中の精鋭四千を川尻に出して封境防備の任に當らしめる事になつた。

わが神山甚兵衛も、此人數の裡に加つて居た。成年を越したばかりの若武者であつたが、兵法の上手である上に、銅色を帶びた、雙の腕には强い力が溢れて居る。

國境を守つて、松倉家からの注進を聞きながら、脾肉の歎を洩して居る內に、十餘日が經つた。愈々十二月八日、上使板倉內膳正が、到着した。細川勢は、抑へに抑へた河水が、堤を決したやうに天草領へ雪崩れ入つた。が、然し一揆等が、唯一の命脈と賴む原城は、要害無雙の地であつた。搦手は天草灘の波濤が、城壁の根を洗つて居る上に、大手には、多くの丘陵が起伏して、其間に泥深い、沼澤が散在した。

板倉內膳正は、十二月十日の城攻に、手痛き一揆の逆擊を受けて以來、力攻めを捨てて、兵糧攻めを企てた。が、夫も、長くは續かなかつた。十二月二十八日、江府から松平豆州が上使として、下向したと云ふ情報に接すると、內膳正は、烈火の如く怒つて、原城の城壁に、自分の身體と、手兵とを、擲げ付けようと決心した。

細川家の陣中へも、總攻めの布告が來た。然し翌二十九日は、冬には稀な大雨が降り續いて、沼池の水が溢れた。三十日は、昨日の大雨の名殘りで、軍勢の足場を得かねた。

翌くる、寛永十五年の元朝は、敵味方とも、麗らかな初日を、迎へた。內膳正は、屠蘇を汲み乾すと、立ちながら、膳を踏み碎いて、必死の覺悟を示した。

此の日は、夜明け方から、吹き募つた、烈風が砂塵を飛ばして、城攻には屈强の日と見えた。正辰の刻限から、寄手は、息もつかず、犇々と攻め寄せた。

神山甚兵衛も、出陣以來、待ちに待つた日に、逢ふ事を喜んだ。彼は、少年の折から、一度は實地に使つて見たいと望んで居た、天正祐定の陣刀を、振り被りながら、難所を選んで戰うた。

然し寄手は、散々に打ち惱まされた。內膳正が、流丸に當つて倒れたのを機會に、總敗軍の姿となつて、引き退く後を、城兵が城門を開いて、慕うて來た。

此時である、甚兵衛は他の若武者と共に細川勢の殿をして戰ひながら退いた。其時に、敵方の一人が執念く、彼に付き纏つて來た。六十に近い、右の頰に、瘤のある老人である。彼は鎧の胴ばかりを付けて居た。目の裡は異樣に輝いて、熱に浮かされたやうに「さんた、まりや」と掛聲をしながら打ち込んで來る。息切れで苦しがりながら、懸命に打ち込んで來る。敵を倒す事も、自分が斬られる事も、念頭にない。たゞ無性に太刀を振る事が、宗教的儀禮の一部で

あるやうに見えた。

甚兵衛も、かかる老人に對しては、何等の鬪志もなかつたが、餘りに執念く、付き纏ふので、仕方なく一刀を肩口に見舞うた。

老人は、血を見ると、一種の陶醉から覺めて命が惜しくなつたらしく、急に悲鳴を擧げながら逃げ出した。すると甚兵衛も夫に釣られて、十間ばかり、追ひかけようとした途端、一人の壯漢が彼の行く手を遮ぎつたのである。

其男は、南蠻風の異樣の服裝をして居た。そして甚兵衛には解せぬ呪文を高らかに唱へながら、太刀を廻して、切つて掛つた。甚兵衛は、中段で受け止めたが、相手の腕の冴えて居る事は、其の一擊が十分に證明した。甚兵衛は朝からの戰で、可なり疲れて居て、冑の重さが、ひしひしと應へるのに、其男は、輕裝して居る爲に、潑剌たる動作を爲した。おまけに、太刀を打ち合ふ毎に、其男が胸に吊して居る十字架が甚兵衛の眼を射た。彼は其十字架に不思議な力が籠つて居るやうに思つて、一種の魅力をさへ感じた。甚兵衛の太刀先を相手が避けて、飛び退つた機みに、二人の位置が東西になつたと思ふと、敵の十字架に折柄入りかかる夕陽が煌めいて、燦然輝いたと思ふ途端、甚兵衛は頭上に強いショックを感じて、アッと思ふ間もなく昏倒した。

「甚兵衛どの、甚兵衛どの。」と呼ばれる聲に彼はふと、自分に返つた。目を開くと桶側胴の鎧を着た若武者が、自分の傍に立つて居るのを見た、そして其足許には、十字架を掛けた以前の壯漢が斬られて間もないと見え、時々弱い痙攣を血にまみれた全身に起してゐる。

「惣八郎、助太刀を致した。」と其若武者は云つた。其男は、まぎれもない、同藩の佐原惣八郎であつた。甚兵衛は、頭を一振り振つて、初めて意識の統一を取返した。彼が壯漢の爲に、一擊を受けて昏倒した所へ、惣八郎が駈け付けて、危急を救つて呉れた事が、彼の頭の裡に明瞭に分明した。

彼は惣八郎に對して命を助けられた、感謝の言葉を云はねばならなかつた。然し夫が何うしても、口に出なかつた。

「良き兜で御座るな。」と惣八郎は何氣なく云つて、死骸から例の十字架を放づして、自分の物にしてしまふと、

「さあ、はや參らう。殘つて居る者は、われ等ばかりぢや。」と云ひ捨てたまま、小さい溝を飛び越えて畔道を跡をも見ずに、急いだ。

甚兵衛は、獨り取殘されて、深い溜息を洩した。彼は困つた事になつたと考へた。何うして、一刀の下に、斬り殺されなかつたかを、悔んだ。自分の兜の良いのと、敵の刀の切味の鈍いのが恨まれた。

彼は、惣八郎から恩を着る事を欲しなかつたのである。彼が昏倒した時に、若し意識が殘つて居て其儘殺されるのが良いか、惣八郎に助けられるのが良いかと、尋ねられたら彼は、卽座に死の方を選んだであらう。

甚兵衛と惣八郎とは、犬猿も啻ならぬ仲と云ふのではなかつた。然し、甚兵衛は、惣八郎が何となく嫌であつた。磊落な甚兵衛には、ツンと取り濟した惣八郎が氣に入らなかつた。其上、甚兵衛が惣八郎に含んで居る事が一つある、夫は外でもない惣八郎と甚兵衛とは、兵法の同門であつた。三年前產土神の奉納仕合に、甚兵衛と惣八郎は、顏が合つた。其時に甚兵衛は敗れた、が夫以來、甚兵衛は其敗戰を償ふ爲、身を碎いて、稽古をした。そして、惣八郎と今一度の手合せを願つて居る。所が惣八郎は色々な口實で、夫を避けた。「惣八郎どのと、甚兵衛どのとは、腕前に於て孰れが上ぢゃ。」など云ふ懸案が同門の間に、提出せられる度に、惣八郎は「われらが如き。」と云つて謙遜した。しかし、その言葉の後に、洩す微笑は、その言葉の文字通りの意味を、取り消して居ると噂された。が二人は道で逢へば、會釋もした、同席の場合には、言葉も交した。然し甚兵衛は、一時の勝利の效果を永く保存しようとする惣八郎を、可なり含んで居て、何時かは目に物見せようと、心掛けて居た。其對手から、彼は意外にも恩を着たのである。

彼は、强い衝動の爲に起つた、頭の痛みを感じながら、惣八郎に依つて、無意識の裡に着せられた恩を悔んだ。「惣八どのが、甚兵衛の持て餘した敵を打ち取つた。甚兵衛は、日頃大口を叩くが、戰場では殊の外手に合はぬ男ぢゃ。」

と云ふ噂が、陣中に傳つたら、何うしようかと、考へた。其上、自分の嫌な男を、一生、命の恩人として、持つて居る事は、如何に不快であるかを考へた。

彼は力なく、立ち上つて、陣へ退く途中で色色と、頭を惱した。そして、到頭、この不快を取り除く第一の手段は、早く恩返しをする事だと考へ付いた。惣八郎の危難を助けてやればよい、彼に受けた丈の恩を返してやればよいと思つた。其上、今は戰場である。そんな機會が、幾度も來るに違ないと思つた。すると、餘り屈託をした、自分が馬鹿らしくなつて來た。彼は元氣を可なり取り返す事が出來た。

陣中へ歸つて見ると、同輩は何とも云はなかつた。惣八郎はと、見ると篝火の火影で、鐵を使つて居た。惣八郎は今日の出來事を、誰にも、披露しなかつたのだ、と思つた。が、甚兵衞の心の裡には夫に對する感謝の心は湧かなかつた。彼は、二重に恩を着たやうな心がして、心苦しくさへ思つたのである。

其後も、惣八郎が、金の十字架を分捕したと云ふ話をする者はあつたが、然し其の出來事に就ては誰も一言も云はなかつた。甚兵衞は、自分の前を憚つて云はぬのかと思つた。が然し、夫は彼の邪推である事が、間もなく分つた。

甚兵衞は、一心に報恩の機會を待つた。惣八郎とは、陣中で朝夕顏を見合はしたが、惣八郎は何とも、其日の出來事に就ては、云はなかつた。甚兵衞の方でも、自ら其日の出來事に就て語るのを避けた。彼は惣八郎から恩を受けた事を、惣八郎に對して公認する事がいかにも不快であつた。今にも、恩返しをしてやると心の裡で思つて居た。

やがて、正月五日になると、上使松平伊豆守が天草表へ到着した。甚兵衞は、華々しい城攻めが近づいて來た事を欣んだ。然し伊豆守も、亦、兵糧攻めの策を採つて、いたく甚兵衞を落膽させた。

無爲な日が續いた。細川の陣でも、時々物見の者を出すばかりであつた。甚兵衞は、毎日のやうに惣八郎と顏を見合せた。そして惣八郎の言語や、笑の裡に自分に對する侮蔑が交つて居はせぬかと、氣を廻した。其上に、惣八郎と同座して居ると、命を助けられたと云ふ意識が、一種の壓迫を感ぜしめて、可なり不快であつた。

二月八日に、絕えて久しき城攻めがあつた。甚兵衞は今日こそと勇み立つた。彼が戰場に向ふ動機は、功名をする爲でもなければ、主君の爲でもなかつた。一途に恩を返す事を念としたのである。彼は無論惣八郎の後を跟けた。惣八郎は其日も懸命になつて戰つた。敵は大抵百姓である上に、兵糧が段々乏しくなりかけて居た爲か、惣八郎の手に立つ者とては、一人も居なかつた。無論甚兵衞の助太刀を要するやうな機會は來なかつた。

ただ一度、惣八郎は敵と渡り合つて居る裡に、足を滑らせた。が、片膝を突くと共に、付け入らうとした相手を、腰車に見事に斬つて捨てた。

甚兵衞は、其日殆ど太刀打をしなかつた。自分の前に進んで行く惣八郎が烈しく戰つたからである。彼はさうして、終日惣八郎の手痛い戰を見物するばかりであつた。

二月の二十八日は慈々、總攻めの日と定まつた。城を圍んで居る、九州諸藩の軍勢四萬三千人の裡原城の陷落を望まなかつたのは、恐らく甚兵衞一人であつただらう。無論寄手の裡に交つて居る、切支丹宗門の者や德川幕府に恨を含んで居る者は、一揆の長く持ち堪へる事を、望んで居たかも知れない。然し、さうした宗教的な、政治的な動機を離れて、自分の獨自の心で、甚兵衞は原城の陷らぬやうにと、祈つて居た。

「もう、軍も今日限りぢや。城方は兵糧がない上に、山田右衞門作と申す者が、有馬勢に內應の矢文を射た。」と、云ふ噂が人々の心を引き立たせた。功名も今日限りぢや。身上を起すには今日を逸してはならぬと寄手は勇み立つた。

甚兵衞も今日限りだと思つた。今日を逸して泰平の世になつたら、命を助けて貰つた程の、恩を返す機會は、絕對に來ないことを知つたからである。

其日惣八郎は、やはり細川勢の魁であつた。何時も必ず魁をする甚兵衞が、惣八郎に位置を讓つたからである。

戰ひは烈しかつた。宗徒どもは「さんた、まりや」と口々に叫びながら、刀槍、弓矢を初め

鍬、鎌などをさへ手にして、戰つた。三の丸が陷ちてから、城方の敗勢はもはや何うすることが出來なかつた。素肌の老幼などは、一擊の下に倒された。彼等は倒れると、倒れたまに、十字を切つて、從容と神の國へ急いだ。

惣八郎は手に立ちさうな相手を選んでは、薙ぎ倒した。甚兵衛は、朝來惣八郎の手柄を見て歩いた。時々は彼も亦、自ら戰ひたい慾望に、驅られて手を下したが、かうして大事な機會が過ぎ去るのが、惜しまれたので、敵を巧に避けては、惣八郎の後を追つた。

午の刻を過ぎた。諸方から燒き立てられた火の手は、到頭本丸に達した。原城の最後の時が來た。城樓の燒け落つる音に交つて、死んで行く切支丹宗徒の最後の祈禱や悲鳴が聞えた。

其處には、血と炎との大なる渦卷があつた。流石の甚兵衛も、惣八郎を見失つてしまつた。夕闇の迫つて、來るに從つて、益々丹の色に燃え盛る原城を見詰めながら、彼は不覺の涙を流したのである。

三月の二日、細川の軍勢は、熊本に引き上げた。翌上巳の日に、從軍の將士は忠利侯から御盃を頂戴した。甚兵衛も惣八郎も、百石の加增を賜つた。其日、殿中の廊下で甚兵衛は惣八郎に逢つた。惣八郎は晴々しい笑顏を見せながら、「御同樣に、お目出度い事で御座る。」と云つた。甚兵衛は、戰場で「良い兜で御座る。」と賞められた時と、同じ程度の侮辱を味つた。

泰平の日が始まる。

が、甚兵衛は、戰中と同じやうな、緊張した心持で、報恩の機會を狙つた。宿直を共にする夜などは、惣八郎の身に危難が迫る場合を色々に空想した。參勤の折は、道中の驛々にて、何等かの事變の起るのを、夫となく俟つた事もある。

然し、惣八郎は無事息災であつた。事變の起り易い狩場などでも、彼は輕捷に立ち廻つて、怪我一つ負はなかつた。其上に、忠利侯のお覺もよかつた。

二、三年經つ裡にも、機會が來ないので、彼は焦ら立つた。彼は自分で惣八郎を、危難に陷し入れる機會を作らうかとさへ考へた。然し夫には、彼の心に強い反對があつた。

彼は又恩を受けたと、云ふ事實を忘れようかと、考へて見た。然し夫が徒勞である事は、直ぐ分つた。家中の若者が一座して、武邊の話が出る時は、必ず島原一揆から例を引いた。殊に、慶長元和の古武者が死んで行くに從つて、島原で手に合うた者が、實戰者としての尊敬を擅にするやうになつた。

「甚兵衛殿は、島原での覺があらう、太刀は凡そ、何寸が手頃ぢや。」などと云ふ質問がよく、甚兵衛に向けられた。其度に彼は不快な記憶を新にした。

其上に、惣八郎は祕藏の佩刀の目貫に、金の唐獅子の大きい金物を附けて居た。夫を彼は自慢にして居るやうであつた。誰かに來歷を訊かれると、

「之で御座るか、天草一揆の折分捕つた十字架を鑄直した物で御座る。」と、彼は得意らしい微笑を洩した。夫以上の詳細な、說明はしなかつたが、傍で聽いて居る甚兵衛は、席に居たたまらぬ迄に赤面するのを常とした。

寬永十八年に、藩主忠利侯が他界して、忠尙侯が封を繼いだ。夫を唯一の事變として、細川藩には封建時代の年中行事が並なく、繰り返されるのみであつた。

甚兵衛が三十の年を迎へた時、かうして居ては、際限がないと思つた。之迄とは全然別な、手段を採らうと決心した。夫は蟲の好かぬ惣八郎と、努めて入懇にならうとする事であつた。若し、夫が成功したら、嫌な人間から恩を受けて居るのではなくして、入懇の友人から、受けて居る事になると思つた。そして、彼は稍夫に成功した。ある口實があつたのを機會に、家傳の菊一文字の短刀を惣八郎に贈らうとした。彼は自分の家に、なくてはならぬ寶刀を、失ふ事に依つて恩を、幾分でも返したと云ふやうな、心持を得たいと思つたのである。が、惣八郎は、眞正面から、夫を拒絕した。甚兵衛は又其事を快く思はなかつた。惣八郎は、故意に恩を返させまいとするのだ、彼は一生恩人としての高い位置を占めて、默々の裡に、一生自分を見下ろさうとするのだと甚兵衛は考へた。夫ならばよい、意地にも返して見せる、命を助けられたのだから、見事に助け返してやると思つた。二人

の間は見る見る裡に、又元に還つた。

然し、途中で逢へば、惣八郎は大抵言葉を掛けた。甚兵衛は、多くは默禮を以て之に對した。その裡に、二、三年は又無事に過ぎ去つてしまふ。

金の唐獅子は相不變惣八郎の佩刀の柄に光つて、甚兵衛の氣持を惡くした。

その目貫は、甚兵衛には惣八郎に恩を負うて居る事を示す、永久の表章のやうに思はれた。惣八郎は、故意にその目貫を、愛玩するのだとさへ、甚兵衛は思つた。

甚兵衛が四十になつた時、甚兵衛と惣八郎とが相番で、殿中に詰めて居た。その夜、白書院の床の青磁の花瓶が、何物の仕業ともなく、壞された。細川家の重器の一つであつた。甚兵衛は素破事こそと思つた。此のお咎めを自分一人で負うて腹を切つて、惣八郎の命を助けようと思つた。

然し、藩主忠尙侯は、彼が息込んで言上するのを聞いた後「あれか、大事ない。餘の器を出して置け。」と何氣なく云はれた。

彼は餘りに焦立しい時には、一層惣八郎を打果して死なうかとも思つた。然し夫は自分が、恩を返す能力のない事を自白するのと同じだと思つた。

寛文三年の春が來た。甚兵衛は、明けて四十六の年を迎へた。天草の騷動から、數へて二十六年になつた。其間報恩の機會は遂に來なかつたのである。

彼は半生の間、ただ一心に其事ばかりを、考へて居たので、身後の計をさへ、して居なかつた。配偶のきさ女との間には、一人の子供さへ無かつた。が、恩返しの爲に、一命を捨てる時などに心殘りのない事を結句喜んだ。

今年の春から、彼は朝毎に、咳をした。其度に暫くは止まなかつた。彼は初て、朧げながら死を豫想した。前途の短いのを知つてからは、是非爲さなければならぬ報恩の一儀が、愈々心を惱した。

所が、時は遂に到來した。此年三月二十六日、甚兵衛は、藩老細川志摩から早使を以て城中に呼び寄せられた。

志摩は、老眼をしばたたきながら、

「甚兵衛、大切な上意ぢやぞ。」と前置をして、「此度、殿の思召に依つて、佐原惣八郎放打の仕手其方に申付くるぞ。」と云つた。

甚兵衛はハッと平伏したが、その心の裡には何とも知れぬ、感情が汪洋として躍り狂つた。彼はやつと心を靜めて、

「惣八郎奴、何樣の科に依りまして。」と訊いた。すると志摩は稍聲を厲して、

「夫は、其方の知る事ではない、其方は仕手を務むれば良いのぢや、相手も天草で手に合うた者ぢや、油斷すな。」と云ひながら苦笑した。

甚兵衛は周章ててはならぬと思つた。

「とても事に殿直々の上意を。」と乞うた。

志摩は快く夫を許可した。「至極ぢや。」と云ひながら、志摩は甚兵衛を麾いて先に立つた。

やがて甚兵衛は忠尙侯から「志摩が申した事、良きに計らへ。」との有難い上意を受けたのである。

上意打の仕手になる事は、平時に於ける武士の最大の名譽であつた。然し甚兵衛は、もつと大きい喜びがあつた。二十六年狙つて居た機會が來た。彼が明暮望んで居た通り、恩人に大なる危害が迫つて居る。而も其危害の絲を引く者は、實に彼自身であつた。

彼は命を捨てて掛らうと思つた。永く自分を苦しめた、壓迫を今日こそ、地に擲つ事が出來ると思つた。

然し尙殘つて居るのは、手段の問題であつた。彼は最初上意と名乘りかけて、却つて自分が打たれようかと思つた。然し、夫では自分を犧牲にする事が先方に分らぬと思つた。彼は二刻もの間考へ迷つた末、次のやうな手書を認めた。

「一書進上致しそろ、今日火急の御召にて登城致し候處、存じの外にも、其許を手に掛け候やう上意蒙り申候、されど其許には、天草にて危急の場合を助けられ候恩義有之、容易に刃を下し難く候に就いては此狀披見次第、申の刻迄に早急に國遠なさるべく候、以上。」

そして心利いた、仲間を使に立てた。やがて暮に近い頃彼は近頃にない、晴々した心地で惣八郎の家を訪うた。

が、其處には何等の混亂の跡がなかつた。塵一つ止めてない庭には、打水の痕がしめやかであつた。彼は意外の感に打たれながら、案内を

乞ふと、玄關へ立ち現はれたのは、疑ぎれもない惣八郎自身であつた。惣八郎は物靜な調子で、「先刻よりお待ち申して御座る。」と挨拶した。甚兵衞は返す言葉がなかつた。主客は怖ろしい、沈默の裡に座敷へ通つた。

すると、惣八郎の妻女が靜に匕首の載つて居る三寶を持つて現はれた。

惣八郎は居坐り寄りながら、匕首を取上げて、甚兵衞に目禮した。

「いざ、介錯下されい、御配慮に依つて、萬事心殘りなく取置きました。」と云ひながら、左の腹に靜に匕首の切先を含ませた。

甚兵衞は茫然として立ち上り、茫然として刀を振つた。

然し、打ち落した首を見て居ると、憎惡の心がムラムラと湧いた。報恩の最後の機會を、惣八郎の爲に無殘にも踏み蹂られたのだと、甚兵衞は思つた。

惣八郎の書置きには「甚兵衞より友誼を以て自裁を勸められたるに依り、勝手ながら。」とことわつてあつた。

君命にも背かず、友誼をも忘れざる者と云ふので、甚兵衞は、一藩の賞め者となつた。そして殿から五十石の加增があつた。彼はその五十石を惣八郎から、受けた新しい恩として死ぬ迄苦悶の種とした。

其後、享保の頃になつて、天草陣惣八覺書と云ふ寫本が、細川家の人々に讀まれた。其裡の一節に、「今日計らずも、甚兵衞の危急を助け申候、されど戰場の敵は私の敵に非ざれば、恩を施せしなど夢にも思ふべきに非ず、右後日の爲に記し置候事。」とあつた。

（大正六年）

作家としての意識

小說をかく者が、人生を觀る場合に、自分の周圍に起る色々な事件を觀る場合に、何うしても、「小說の題材にしよう」と云ふ意識が伴ふことは止むを得ないことだらうか。自分もある事件の渦卷に、捲き込まれながら、尙作家としての意識を持ちつづけ、冷靜な觀照を續けて行くと云ふこと、その事は作家としては、當然なことかも知れない。然し、そのことは人間としても同じやうに當然なことだらうか。否少くとも幸福なことだらうか。戀人と戀をして居る。そして戀の爭ひや苦しみをして居る。又戀の欣びに浸るとする。而も、さう云ふことをしながら、「いつかこの事を題材としてかいてやらう」と思つて居ることは、可なり不愉快なことではないだらうか。

又從つて、いつも冷靜な作家としての觀照で、相手の女を見て居ることも、可なり嫌なことではなからうか。が、然し作家として立つて居る以上、どんな苦しい經驗にあつても、冷たい作家的の意識は、消滅しない事だらう。然しそんな固定的な意識を伴はなかつた經驗と、孰ちらが本當な經驗であるかと云ふことは、非常な問題ではなからうか。小說に書かうと云ふ意識がある爲に、その經驗に反應する自分の心持が、不純なものになつたりはしないだらうか。作家的の意識と云ふことは、人間として生活して行く爲には、むしろ一種の障害ではないだらうか。

兎も角も、自分は最も親しき者が死んだ場合などにも、尙「今の心持を小說にかいてやらう」などと云ふ心持が自分の心に起りさうなことを思ふと、可なり不愉快である。凡ての經驗に頭から沒入して行かないと云ふことは、作家に當然なことではあるが、それは可なり寂しい嫌なことではないだらうか。

（「文藝閑談」より）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com